

小学校国語科「書くこと」の意欲につなげる授業の手立て

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教育分野 宮本 聖子

1. はじめに

1-1. 書くことの実態

学校では教育活動を通して、子どもたちがメモや記録文、紹介文、観察文など、書く場面が多くある。出来事や意見、感想などを書くことによって、思いが明確になり、確かな考えとして定着していく。したがって、「書くこと」は思考力・判断力・表現力等の育成につながっていくと考えられる。しかし、「書くこと」について苦手意識をもっている児童は少なくない。平成17年に国立教育政策研究所が実施した「特定の課題に関する調査」の質問紙調査において、「文章を書く学習が好きだ」に対して、肯定的に回答した児童の割合は、第6学年で37.4%と低くなっている¹。一方、「文章を書く学習は、ほかの教科や総合的な学習の時間などの学習で役立つ」に対して肯定的に答えている児童の割合は80%を超えている²。このことから、「書くこと」への抵抗感は大きいが、「書くこと」への有用性に対する意識は高いことが分かった。

1-2. 「書くこと」の意欲低下の原因

香月(2020)は、書くための言葉の習得の困難さについて挙げている。困難さを乗り越えても、子どもに疲労感しか残らなければ、次へ向かう意欲はなくなってしまうとしている³。

また、多くの教師が教科書の題材を中心に授業を行うことが多いと考えられる。この教科書の題材の在り方にも、課題が指摘されている。茅野(2022)は、国語科教科書の教材は、全国の子ども向けに作られているため、ある程度抽象度の高い題材を教材として取り上げられているが、児童をそのような題材に対し、書く意欲をもち、書く内容を集めるのは難しいと、指摘している⁴。

このように、児童が「書くこと」へ意欲を持てなくなる理由がいくつか考えられる。総合的にまとめると、児童が「書くこと」を嫌がる理由として、自身が書きたいことではないことによる

「書きたくない」、題材に対し、興味関心がないことによる「書くことがない」、どう書いたらよいか分からないことによる「書けない」があり、香月(2020)は、これらをまとめて、『「書くこと」の指導の壁3N』と言っている⁵。

1-3. 「書くこと」の意欲へつなげるために

では、児童が「書くこと」の意欲へつなげるために必要なものは何だろうか。鹿毛(2022)は、認知的評価理論を用いて、環境(外的事象)の性質が、自己決定の感覚が高まる「自律性支援的」であれば、有能感や自律性の感覚も高まり、よって内発的動機付けも高まるとしている(図1)⁶。

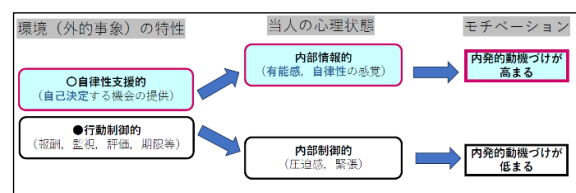


図1 鹿毛(2022)もとに筆者加筆

この理論を基に、「書きたくない」「書くことがない」という思いを、自分で書く内容を決めることで自律性を高めたり、「書けない」という思いを、書き方を習得させて「できた」という有能感を高めたりすることに繋げられるのではないかと考えた。

そこで本研究では、児童の自律性や有能感を高められるような授業の手立てによって、児童の「書くこと」の意欲が高まるのかを検証することを目的とする。

本研究でいう「自律性を高める」とは、児童が書く内容を自分で決定することであり、「有能感を高める」とは、書く技能を身につけ、書く自信をもつこととする。

2. 方法

①授業実践：自律性や有能感を高める手立てを

考え、授業実践を行う。

②アンケート調査：授業実践前と後に、対象児童へアンケート調査を行う。

③分析：実践後、意欲や技能について、また、作品や児童の振り返り、ワークシート、取り組みの様子などを分析し、検討する。

3. 具体的な手立て

3-1. 自律性を高める手立て

自律性を高めるための手立てには、「自分で決める」ということが必要になってくる。岡田（2020）は、子どもが書きやすい題材として、「個々に関心を向けていること」とし、題材を自由に子どもに選ばせることが、書き言葉の題材として適しているとしている⁷。よって、自律性を高める手立てとして、子どもが自分で体験したことなどを中心に、自分の好きなことやものを書くといった、題材を設定していくことにした。そこで、本単元では、児童が自分の好きな「推し」を紹介する文章を書く、という題材を設定することにした。

3-2. 有能感を高める手立て

①書き方の基礎的技術の習得

児童が自信をもって、「書くこと」ができるようにするためには、土台である書き方の基礎的技術をしっかりと身につけることが大切であると考え。鈴木（2013）は、国語科の時間だけでなく、それ以外の時間でも文章表現の練習をさせ、その結果、技術に改善が見られたとしている⁸。これをふまえ、本研究では、実践に入る前から、ワークシートを利用し、スモールステップで書き方の基礎を学ぶようにした。ワークシートは、茅野政徳、曾根朋之（2022）による『「まったく書けない」子の苦手を克服！教室で使えるカクトレ高学年』⁹を使用した。児童に、「宮本先生の挑戦状」として配布し、隙間時間や家庭学習などを利用して、取り組ませるようにした。

②書くための言葉の習得

言葉を多く知っていると、自分の感じたことや考えたことをよりの確に表現でき、しっかりと文章を書くことができる。文部科学省（2008）「教科書の改善・充実に関する調査研究

報告書（国語）」は、文章を書く上で、または他教科の授業を進めていく上でも必要な語彙が不足していると指摘している。また、国語科において基礎となる語彙などを体系的に習得させるための教材、学習活動が必要であるとしている¹⁰。児童が書くために、必要な言葉を洗い出し、可視化することで児童に身につけさせていくようにしたいと考えた。そこで、本単元では、光村図書の小学校国語教科書に掲載されている「言葉の宝箱」を参考に、本単元で書くときに必要となる言葉を抽出し、児童に提示する方法を考えることとした¹¹。

③ワークシートの活用

作文を書く際には、単に思いついたことを並べるだけでなく、順序立てて分かりやすく伝える力が必要になり、その手立てとしてワークシートが使用される。内藤（2015）は、ワークシートの利点として、①情報を整理できる②考えを焦点化できる③学習の成果を一覧でき、確認できる④子どものつまずきに気づき、支援することができる⑤授業評価の材料を収集する機会となる、といった点を挙げている¹²。ワークシートを活用する効果がある一方、ワークシートを使用しても、実際の文章に上手く繋げることができないことも多いと考えられる。このことをふまえ、本単元では、児童に何を書かせたいのか、目的を明確にして、児童の思考に沿ったワークシートづくりを目指していく。思考ツールや付箋なども使用し、情報を整理しやすくするための方法を考えることとした。

4. 授業の実際

(1) 対象校 山梨県内の公立小学校

(2) 期間 2024年9月

(3) 対象児童 第5学年児童（27名）

(4) 単元名 私の「推し」を紹介します
～「推し」の魅力が伝わるように書き表し方を工夫する～

(5) 単元指導計画

次	時	学習活動
第1	1	・自分たちの「推し」について紹介する文章を書くという学習の見通

次		しをもつ。 ・例文を読み、紹介する文章の特徴を確かめる。 ・学習計画を立てる。
	2	・書くテーマを決める。 ・情報の収集を行う。
第2次	3	・構成について知る。 ・題材を基に構成メモを作成する。 ・構成の検討をする。
	4	・構成メモを基に、紹介文を書く。
	5	・書いた文章を読み返して、文章を推敲する。
第3次	6	・互いの文章を読み合い、感想を交流してよさを共有する。 ・学習を振り返る。

(6) 授業実践

単元全体の流れを以下に示す。

①第1時（紹介する文章の特徴を知り、学習の見通しをもつ）

授業の導入として、「推し」とはどのようなものかについて、児童と対話しながら説明した。その後、教師の例文を見せ、これから書く文章の特徴を理解させた。今後の学習のイメージを持たせた。本時の活動のねらいは、これからの学習の見通しを持たせることである。そのために、毎回の授業を振り返るための「振り返りシート」を作成し、児童に配布した（図2）。

図2 振り返りシート

「振り返りシート」は、毎回その日の授業を終えての振り返りを書いてもらうことにし、授業後には、教師が集め、児童の振り返りに対して、毎回コメントを入れるようにした（図3）。第1時の授業では、振り返りを書く際の観点についても説明した。なお、「振り返りシート」を拡大したものを教室に掲示し、授業の計画をいつでも確認できるようにした。

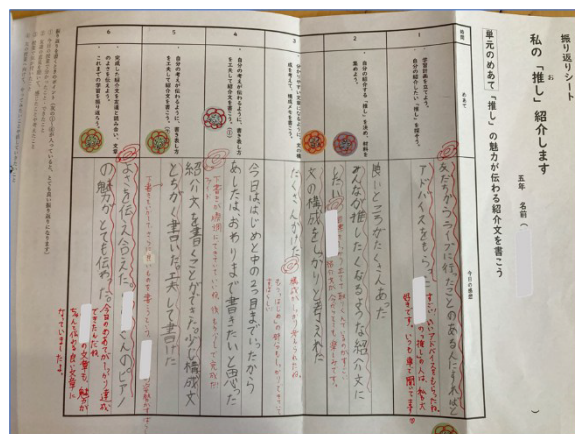


図3 児童の振り返りシート

②第2時（書くテーマを決め情報の収集を行う。）

第2時では、自分が皆に紹介したい題材を見つけ、書くための材料を集めて、情報を整理することがねらいである。まず、児童に今回紹介する「推し」について考えさせた。「推し」が決まった児童は、ワークシートを用いて情報を整理した。ワークシートは、思考ツールの「クラゲチャート」を用いたものを作成し、それを使用した（図4）。ワークシートに書いたことがこれから書く紹介文の中心になることを伝え、良いことや伝えたいことをたくさん書くように伝えた。

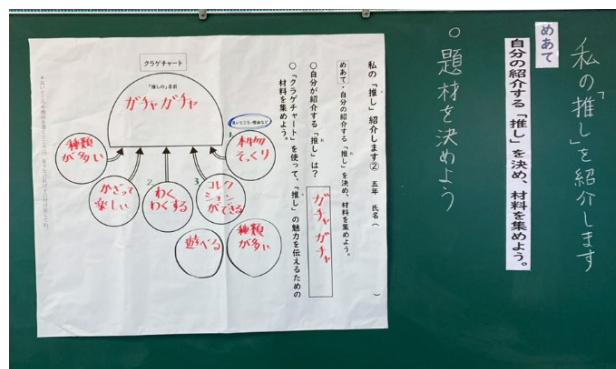


図4 第2時の板書

③第3時（構成メモを作成し構成を検討する。）

第3時でのねらいは、紹介文の特徴を踏まえ、分かりやすい文章になるように、文章全体の構成を考えることである。構成を考える手立てとして、まず、教師の作品例を使用して、文章の構成を確認した。「はじめ」「中」「終わり」を色分けし、それぞれどのようなことを書くのかについて説明した。その後、児童に構成メモを作成させた。構成メモには、書き出しや文末の例を載せ、児童が活用しやすいようにした。前回のクラゲチャートに書いたことから、「中」に書く材料を三つ程度選ばせ、付箋に記入させた。また、選んだ情報から「押し」の魅力を伝えるには、どの順番で書くかを考えさせた。その際、付箋を使用し、それを移動することで、構成を考えさせるようにした（図5）。

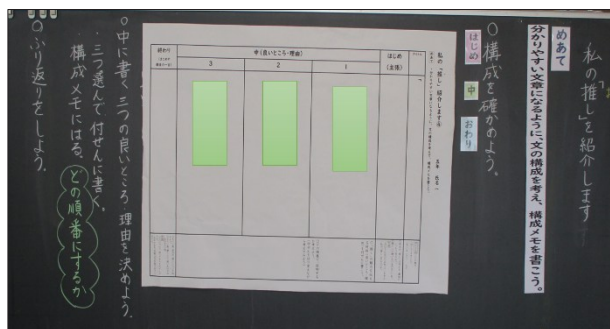


図5 第3時の板書

④第4時・5時（構成メモを基に紹介文を書く。）

第4時・5時のねらいは、構成メモを基に、自分の考えが伝わるように、書き表し方を工夫し、紹介文を書くことである。まず、前回の構成メモを参考に、下書きを書かせた。その際、児童には、「書くための言葉の一覧表」を配布した。これは、光村図書の小学校国語教科書に掲載されている「言葉の宝箱」¹³を参考にし、「順序を示すつなぎ言葉」「事物の様子を伝える言葉」「気持ちを伝える言葉」から、今回の紹介文に活用できそうな言葉を選び、教師が一覧にしたものである（図6）。児童に配布した際、紹介文を書いていくときに、これらの言葉を意識して活用していくように声掛けを行った。

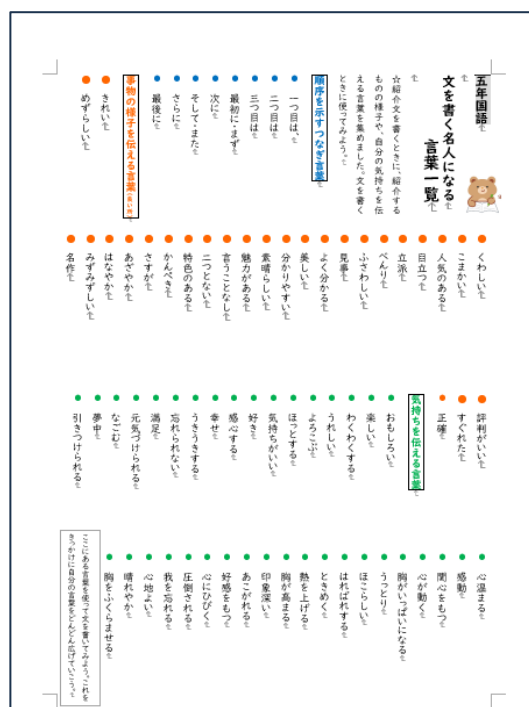


図6 書く言葉の一覧表

下書きと清書では、専用のワークシートを使用した。ワークシートには文例や文末などの例を載せて、それを活用しながら書き進められるようにした。下書きを終えた児童は、自身で推敲を行い、訂正がある場合は、下書きのワークシートに書かせた。その際、推敲のポイントの一つとして、書く言葉の一覧表から、言葉が使えたかどうかについて、自己評価させた。下書きができた児童は、清書のワークシートを使って、清書を行った。ほとんどの児童が第5時まで、紹介文を完成させることができた。

⑤第6時（紹介文を読み合い感想を伝え合う。）

第6時のねらいは、文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見つけることである。そこで、書いた紹介文を互いに読み合い、感想を交流する活動を行った。隣の席の児童や、友達と読み合って感想を伝え合った。その際、ワークシートに感想や良かった点などを書いてもらうようにした（図7）。終末として、今回の授業を通して、学習を振り返り、振り返りシートを使用して、自己評価を行った。



図7 読み合って感想を交流する児童の様子

5. 結果と考察

(1) アンケート結果

5年生児童27名に対し、授業実践の前後に「書くこと」に対するアンケート調査を行った。

表1 児童アンケート質問項目（事前）

項目	調査内容(事前)
1	文章を書くことは好きですか。嫌いですか。
2	【1】の理由は何ですか。
3	「書くこと」の学習で、自分の思いや考えを伝えることができますか。
4	文章を書くときに、困ったと思うときはどんな時ですか。

表2 児童アンケート質問項目（事後）

項目	調査内容（事後）
1	（今回の授業を終えて）文章を書くことは好きですか。嫌いですか。
2	【1】の理由は何ですか。
3	今回の「書くこと」の学習で、自分の思いや考えを書くことができましたか。
4	文章を書くときに使ったワークシートや付せんなどを使うことで、文章は書きやすくなりましたか。

授業実践前と後の質問1の結果は、図8の通りである。授業実践後に、「文章を書くことは好きですか・嫌いですか」という質問に対して、「好き・どちらからかと言えば好き」が、授業実践前に

比べ、増えていることが分かった。また、「嫌い・どちらかと言えば嫌い」は減っていることが分かった。

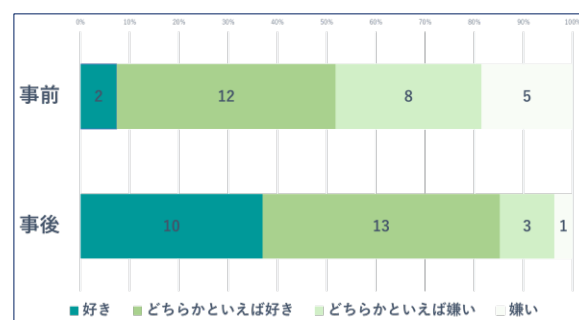


図8 【質問1】（事前・事後）結果

質問2で、授業実践後に、「文章を書くことが好き・どちらかといえば好き」と答えた児童の主な理由を、表3に示す。

表3【質問2】授業実践後に「文章を書くことが好き・どちらかといえば好き」と答えた児童の主な理由

1	題材が書きやすかったから。	2人
2	「推し」の紹介文を書くことはなかったけど、書いてみて楽しかったから。	2人
3	書きたいことを書けたから	2人
4	自分の推しを書くことができたので、文章を書くことがもっと好きになった。	1人
5	先に、ふせんなどで書くことを決めて書きやすくなったから。	1人
6	言葉一覧表などで書きやすくなったから。	1人
7	ワークシートで書きやすくなったから。	1人
8	自分の好きなことを伝えたり、友達の好きなことが知れたりするから。	2人
9	友達に読んでもらって「分かりやすかったよ。」と言われてうれしかったから。	1人

授業後に、文を書くことが好きになった、と回答した児童の主な理由を分析すると、次の三つに分類され则认为る。

一つ目は、児童の主な理由の1~4のような「題材」が要因になったと思われることである。今回の授業では、題材を「推し」とし、自分で好きなことや好きなものを書くように指示した。これ

が児童にとって新たな経験であり、意欲につながり、自分で決めるという「自律性」が高まり、「書くこと」が好きという気持ちに繋がったのではないかと考える。

二つ目は、児童の主な理由の5～7のような「手立て」が要因になったのではないかとということである。今回の授業実践において、書くための有能感を高める手立てとして、活用した付箋やワークシート、言葉一覧表が、児童にとって効果的であったと考えられる。

三つ目は、児童の主な理由の8～9のような「相手意識」も要因の一つになったのではないかとということである。今回の実践では、第1時で自分の「推し」を友達に伝えるということを伝えた。その際、いつも過ごしている友達に、「初めて知った」と思ってもらえるような紹介文を目指していこう、という話をした。児童にとって、誰に向けて書くか、という見通しができたことで、意欲につながったのではないかと考えられる。

では、「書くこと」が好きではない児童の理由とはどのようなものなのであろうか。質問2で、授業実践前に、「文章を書くことが嫌い・どちらかといえば嫌い」と答えた児童の主な理由を、表4に示す。

表4【質問2】授業実践前に「文章を書くことが嫌い・どちらかといえば嫌い」と答えた児童の主な理由

1	文字をたくさん書くので時間がかかるから。	2人
2	書く内容を考えるのがめんどくさいから。	2人
3	自分で考えることができないから。	2人
4	文章をどう書けばよいか、分からなくなってしまうから。	2人
5	書くことがないと、考えるのに時間がかかってしまい、書く時間が少なくなってしまうから。	1人
6	下書きも書かないといけなから。	1人
7	あまり文章を思いつかないから。	1人

さらに、質問4で授業実践前に、「文章を書くときに、困ったと思う時はどんな時ですか。」と

いう質問項目に対して、児童が回答した主な理由も合わせて考えたい。どのような時に困っているのかについて、まとめたものを表5に示す。

表5【質問4】授業実践前に「文章を書くときに、困ったと思う時はどんな時ですか」という質問に対して回答した児童の主な理由

1	考えが思い浮かばないとき。	7人
2	長い文章を書かなければいけないとき。	2人
3	文章をどう書けばいいのかわからないとき。	2人
4	下書きが終わっていないとき。	1人
5	段落を変えるかどうか、分からなくなったとき。	1人
6	「そして」や「それで」などをたくさん使ってしまったとき。	1人
7	引用した言葉をどうまとめたらいいか、分からないとき。	1人

表4と表5を合わせて見ていくと、「書くこと」に対して面倒や手間がかかることで、嫌いになっている児童がいることが分かる。また、書き方が分からなかったり、書く内容が考えられなかったりして、嫌いになる児童もいることが分かった。

しかし、授業実践後に、「文章を書くことが好きですか、嫌いですか」という質問に対して「嫌い・どちらかといえば嫌い」答えた児童は、前述の通り、減っている。さらに、その児童に理由を聞いたところ、表6のような回答があった。

表6【質問2】授業実践後に「文章を書くことが嫌い・どちらかといえば嫌い」と答えた児童の主な理由

1	つかれるから。	1人
2	作文を書いたら発表などをしないといけなから。	1人
3	「推し」があまりいないから。	1人
4	見られたくないから。	1人

表4・5と表6を比較して見ていくと、書くことに対して、手間や面倒に当たる理由は減っており、書き方や書く内容に悩む理由はなくなっていることが分かった。手間がかかる・面倒・書

き方が分からない・書く内容が思いつかないといったことで、「書くこと」が嫌いだった児童にとっては、「推し」を書くことやいろいろな手立てが有効に働き、書くことへの意欲が高まったと考えられる。

(2) 児童の様子と学習感想

児童の学習活動への様子や学習感想に着目し、手立てが有効であったかについて、2人の児童の様子から確認する。

①自律性に関する手立てについて【A児】

普段の授業は、積極的に取り組んでいる様子はあまり見られなかった。また、授業中にはノートなどを取るのを嫌がることもあり、声をかけると「書くのが面倒くさい」と言っていた。

授業実践に入り、第1時で、「推し」を紹介する文章を書くことや、自分の好きな「推し」を書いてよいことを伝えた。すると、「自分で決めて書いていいの？やったあ。」と喜ぶ反応を見せ、自分から進んでワークシートに取り組んでいる様子が見られた。以下に、A児の学習感想を示す。

表7 A児学習感想

第1時	自分のしょうかいしたい「おし」を見つめられた。次のじゅぎょうは、たくさん材料をあつめたい。
第2時	材料をいっぱいあつめられた。〇〇さんは自分以上にかいていた。
第3時	こうせいのだいめい、はじめを決められた。次はじぶんの考えがたつたように中をかきたい。
第4時	今日は、下がきの中2までかけた。あしたまでに、おわるようにがんばりたい。
第5時	せい書をおわらせられた。
第6時	文章のよさを伝えられた。
授業後	だいがいが、かきやすかった。

第2時の題材集めでも、悩むことなく、書く内容をすぐに決めている様子が見られた。第3時から第5時の構成を考えたり、文章を書いたりする活動の際も、その日の内容を理解して取り

組み、意欲が高まっていることが分かる。「自分で書くテーマを決める」という手立てが、A児の意欲を支えたと思われる。したがって、自律性に関する手立てが有効であったと考えられる。

②有能感に関する手立てについて【B児】

授業実践前のアンケートで、B児は「文章書くことは、どちらかと言えば嫌い」と回答していた。授業では、真剣に取り組んでいるが、あまり積極的な様子は見られない。また、学習を進めている時に、困ったことがあっても、自分から聞くことはできずに悩んでいる様子が見られたときもあった。以下に、B児の学習感想を示す。

表8 B児学習感想

第1時	自分のみんなに紹介したい推しをみつけることができた。友達はキャラクターやアイドルを推しにしていた。みんなが、ちがう推しや同じ推しを推しにしていることがわかった。
第2時	クラゲチャートを使って、自分の推しの材料を集めることができた。〇〇さんが、クラゲチャートで材料を多く集めていてすごいなあと思った。
第3時	自分の推しの魅力を三つふせんに書くことができたし、はじめの文もきちんと書けた。
第4時	自分の推しの魅力をたくさん書き、下書きをすることができた。
第5時	自分の推しの清書をさいごまでていねいに書くことができた。
第6時	友達に自分の推しを読んでもらい、いろんな人を書いてもらってよかったし、友達の推しのことも書いてよかった。
授業後	前は嫌いだったけど、ワークシートで書きやすくなった。

B児は、文章を書く活動の際、それまでのワークシートを自分で見返したり、確認したりしながら、自分の力で学習を進めている様子が見られた。学習感想でも「ワークシートで書きやすく

なった」と回答している。また、学習感想には、全体的に書く意欲が表れた記述が多いことも分かる。B児がその日の内容を理解し、自分がどこまでできたのかを、振り返る記述になっている。本実践では、有能感を高める手立てとして、ワークシートや付箋、言葉一覧表などを児童に使用させたが、それらが、B児の「書くこと」の意欲を支えることになったと思われる。したがって、これらのことから、有能感に関する手立ては有効であったと考えられる。

6. おわりに

本研究では、児童の自律性や有能感を高められるような授業の手立てによって、児童の「書くこと」の意欲が高まるのかについて検証することが目的であった。結果、「自分で書くテーマを決める」という自律性を高める手立てによって、児童は「書きたい」という意欲を持ち、書くことができた。また、書き方を練習させる、書くための言葉を提示する、考えを整理できるようなワークシートや付箋を使う、といった有能感を高める手立てによって児童は「書けそうだ」という自信を持ち、書き進めることができた。したがって、自律性を高める手立てと有能感を高める手立てそれぞれが、児童の意欲向上に関して有効であることが明らかになったと考える。

しかし、今回の研究において、課題も出てきた。一つ目は、「書きたい」と思う意欲を持たせるための教材づくりをどのように行っていくかということである。今回「推し」を書くといった、自律性を高める手立ては有効であることが分かった。今後も、教科書の題材をそのまま実践するのではなく、伝える相手や目的などを設定し、児童の経験に近づけた単元を設定するなどの教師の工夫が必要であると考え。児童の「書きたい」という意欲を喚起させる持たせるための教材づくりについて研究していきたい。もう一つは、「書くこと」の意欲をどのように維持していくかということである。今回の研究では、継続や習慣化という点についてまで検討することはできなかった。高まった意欲をどう維持していくかについて、今後、児童の実態に合わせて習慣化

につながる手立てを考えていきたい。

7. 注

- 1 国立教育政策研究所（2006）『特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）』
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei/index.htm>
(2024.5.10 閲覧)
- 2 注1に同じ
- 3 白坂洋一・香月正登（2020）『子どもの論理で創る国語の授業 -書くこと-』明治図書 pp.10-15
- 4 茅野政徳、曾根朋之（2022）『「まったく書けない」子の苦手を克服！教室で使えるカクトレ高学年』東洋館出版 p.12
- 5 注3に同じ
- 6 鹿毛雅治（2022）『モチベーションの心理学』中公新書 pp.205-210
- 7 岡田博元（2020）「対話を通して書き方に目を向ける」『実践国語研究 358 号』明治図書出版 pp.14-17
- 8 鈴木智信（2013）『小学校高学年の国語科における書く力を育てる指導方法についてーモニタリング育成による表現内容の構造化・推敲を通してー』『群馬大学大学院教育学研究科課題研究報告会資料集』群馬大学
- 9 注4に同じ
- 10 文部科学省（2008）教科書の改善・充実に関する調査研究報告書（国語）ー平成 18,19 年度文部科学省委嘱事業「教科書の改善・充実に関する研究事業」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/08073004/002.htm
(2024.10.6 閲覧)
- 11 光村図書（2024）『言葉の宝箱』「小学校国語 2 年～6 年」光村図書
- 12 内藤成子(2015) 「学習内容の定着をめざす授業改善に関する研究ーワークシートの有効な活用を通してー」『山梨大学大学院教育学研究科教育実践研究報告書』山梨大学教職大学院 pp.158-160
- 13 注11に同じ